

ビジネスマナー講座



No.45 友人を見舞うときの心得

友人や知人が病気で入院したときに、難しいのがお見舞いに行くタイミングです。皆さんも、すぐにお見舞いに駆けつけても良いものか迷うことがあるのではないのでしょうか。今回は友人・知人を見舞うときの心得についてお話ししていきます。

お見舞いに行く場合ですが、まずご家族に連絡をとり、見舞ってよい状態かどうか確認をとりましょう。入院直後や手術の前後、また、本人や家族が人との面会を避けたいような口ぶりのときは、遠慮するのがマナーです。

もし見舞いに行くことになれば、病

院の面会時間を調べ、その規則に従います。服装はあまり派手でなく落ち着いた感じのものを。複数で行く場合は三人ぐらいが限度で、それ以上は病人を疲れさせるだけです。見舞う時間は5分から長くても30分程度と心得ましょう。看護師さんが処置に来たときは退室します。面会謝絶となっていたら病室の外でご家族に挨拶し、見舞いの品などを渡して帰ります。

次に見舞いの品ですが、鉢植の花は寝つく（根つく）につながり、白ばかりの花束や、黄、白の菊は葬儀を連想させるからよくないなどと言われます。普段は気にしない人でも病気になるとう縁起をかついだりするので、注意が必要です。

やはり喜ばれるのは現金でしょう。市販されている左側に赤い線の入った見舞用の袋を使い（まっ白の封筒は弔事を思わせるのでダメ）、「適切な品物がわかりませんでしたので、失礼とは

思いましたか……」や「お好みの物を……」などの言葉を添えて差し出します。金額は一般には5000円程度です。自分がかなり目上の立場なら、1万円以上になります。

見舞いで最も気をつけたいのが話題です。たとえば「顔色が悪いね」など病人が気落ちするようなマイナスの言葉や、こちらからしつこく病気の経過を深刻そうな顔で聞いたり、生半可な医学知識を振りまわすのはタブーです。とにかく早く良くなることをみんなが願っているのだという雰囲気は伝わるように、明るい話題を心がけます。

「見舞い」とは、会いに行くことにより、相手が今よりもっと良い状態になることを願う気持ちが根底にあるのが本当の姿です。病人は健康人より不安で、敏感で、ひがみつぽく、そしてちよつと距離をおいて人を見がちであることを忘れないようにしましょう。

（現代マナー研究会 南田ひろ子）